

令和3年度 第1回 総合教育会議 会議録（要約）

期 日 令和3年8月3日（火） 14時00分から15時40分

場 所 雲仙市役所別館3階 会議室1

出席者 市長
金澤秀三郎市長
教育委員会
下田和章教育長、前田眞一教育長職務代理者
森下祐樹委員、仁禮智加子委員、駒田義弘委員

事務局 市長部局
松橋総務部長、松下政策企画課長
教育委員会事務局
富永教育次長、小松総務課長、草野学校教育課長
堀田生涯学習課長、加藤スポーツ振興課長
森田総務課参事補（記録）

会議日程

1 開会

2 市長挨拶

3 議事

学校、家庭、地域及び行政が連携し、地域全体で子ども一人一人の豊かな育ちと社会的自立を支える環境づくりを進める上で現状どんな問題点があるのか。どんな取り組みが必要なのか。

4 その他

5 閉会

【 1 4 : 0 0 開会】

1 開会

2 市長あいさつ

金澤市長 今回の総合教育会議では、学校・家庭・地域及び行政が連携し、地域全体で子ども一人一人の豊かな育ちと、社会的自立を支える環境づくりを進める上での課題のほか、いじめや不登校といった学校が抱える諸問題等について、委員の皆様のお考えや思いを発言いただきながら意見交換ができればと思っている。

3 議事事項

市長の指名により富永教育次長が議事進行を行う。

議事 学校、家庭、地域及び行政が連携し、地域全体で子ども一人一人の豊かな育ちと社会的自立を支える環境づくりを進める上で現状どんな問題点があるのか。どんな取り組みが必要なのか。

※事務局から資料について説明。

富永教育次長 何かご意見はあるか。

駒田委員 教育振興基本計画について、「学校が抱える課題も複雑化・困難化する中で、学校の努力だけにその実現を委ねることはますます困難になっています。」という表現があるが、地域の実態を考えたときに、雲仙市は、そうじゃないという思いと期待がある。

保護者の中にも、いろんな家庭教育の努力をしている方もいるし、地域も子どものためにいろいろやっておられる方がいて、決してみんなが学校に任せているわけではないという思いがある。

学校も、保護者も、地域も、子どもにどう関わっていいのかわからないとか、子育てを学び合う機会を見つけきらないでいるといったものがあると思う。

それは大人自身が社会の変化に混乱をしている面もあるのだろうと思う。

森下委員 部活動について、生徒数の減少はもう食い止めることが絶対出来ない課題で、どこの中学校を聞いても部を運営するには減少が止まらない状態。

小学校の話を聞いてみると、市内にクラブチームが2チーム、千々石のクラブが40人前後

の児童が参加している。その中に、10数人が吾妻から来ているという話を聞いたが、吾妻中学校には陸上部がないので、小学校で頑張って陸上をしても続けることは難しい。

球技の場合、合併して出ているところもあるが、合併してもなかなか運営が難しいような状況もあるみたいだ。

各小中学校のクラブの運営等を聞いてみると、保護者の方々も悩みが多くて、指導者の方とうまく話が出来ないとか、休みの問題とか、そういうのが最終的には地域のつながりや行事等への参加もなかなか出来ない。

コミュニティースクールや学校支援会議等に働きかけをして、意見を出してもらいながら、改善を進めていくような形ができれば、少しずつ子どもたちもゆとりがあり、地域の方とのつながりが出来ていく形に持っていければというふうに思っている。

前田教育長職務代理者 中学校の部活動の指導に入っているが、担当してる種目は、小学校ではない活動で、中学校になって初めてする種目。

そこに最近ガイドラインで、週に平日に1日、土日に1日休みなさいと言われるが、初めて中学校で出会った種目で、楽しくてたまらない、休みだけだとしたくてたまらないので、市の施設を借りて練習しようとする。

学校のコートは、土日は借りないといけませんが、借りると学校の先生が見て部活していると言われ駄目と言われる。

スポーツが好きで初めて出会った種目に、もっと技量を高めたい、楽しみたいという子どもにとっては、そこが障害になってる気もする。

加藤スポーツ振興課長 小学生クラブ活動振興会においては、規約の中で、児童は、午後7時までには練習会場から退館し速やかに帰宅すること、休業日及び活動時間については、雲仙市立学校部活動等に係る活動方針を遵守することになっている。その中では、週当たり2日以上以上の休業日を設け、休業日は平日及び週休日、土曜日曜のいずれかを休むということになっている。

家庭の日については、家庭の日、毎月第3日曜日は休むということでルールが定められている。中学校の部活動と小学生の活動については、同じ足並みで揃えている。

下田教育長 部活動とか、社会体育は、学校の規模が小さくなって、活動人数が制限されて子どもがやりたいことが出来ないというのが雲仙市内の現状。

やりたいスポーツがあるので、少し離れたところに行く、現実には中学校の部活動に入らずに、民間のクラブに所属をしているという子どもたちの実態もある。

話は変わるが、教育委員会には、学校を飛び越して、クレームだけでなく、相談の電話とかがある。同じ学級のお母さん方や地域の人と話をすれば解決していくようなことであっても、そこが出来ずに教育委員会に来ている。だから、保護者の子育ての自信のなさという

か、横の連携が希薄になっているというところを感じられる。

今回、生涯学習課が、子ども会活動が低調なので、何とかしなければいけないということで、新しい組織を立ち上げた。

自分の子どもに対しての悩みとかがあったときに、同じ視点がある保護者同士での解決が難しいというのが、今の現状かなと思う。

堀田生涯学習課長 青少年健全育成協議会と、子ども会育成連絡協議会を統合して、青少年子ども育成会議というのを組織した。

子ども会活動が低調になってきており、役員が1年交代で根づかない、レクリエーションとかをするが、自分の子どもは部活動で試合に行き、役員だから子ども会の行事をやっているのはおかしいのではないのかという話もあった。

青少年健全育成協議会は、OBの方がいるので、組織を統合したら、地域で、また子どもたちに関わることができるのではないかということで、平成30年に組織の規約ができて活動し、今年の6月に完全に統合した。

単発単発でやってたものが継続的にできるので、地域の子どもは地域で育てるという理念に叶っていくのではないかと考えている。

仁禮委員 私も第1子のとき子育て初めてで、頼るのはマニュアルと親に子育ての仕方を聞いて、私は嫁いできたので周りに相談できる人がいない状態で、健康診断に行ったときに子育て中の方から、子育て支援というのがあるよ、保育園に行ってみないと声をかけてもらって、そこに一緒に行ってみたときに、同年代の子ども、親としては年がいろいろな人たちがいる中で、その保育園の先生たちとかと出会って、子育ての相談とかができた。

その時の出会いがよくて、いろんな町で知り合いがいるという感じで、だから今も相談できる方がいなくて直接教育委員会に相談されてる方に、どなたか同じ小学校なりの保護者が気づいて、仲間づくりをしてあげてほしいなと思った。

金澤市長 地域教育力は、よそと相対的な評価をすると、まだまだあるのではないかというふうな意見に聞こえた。

私の場合は、学校教育の現場がわからない。

例えば不登校とかいじめとか具体的な問題が上がってきてから、その視点から現場に落とし込んで見るから、視点が違ってくるというのがある。

雲仙市はまだ地域で子どもを育てて、いろんな問題はあるけど、子どもに目配せするという意味では、まだ捨てたもんじゃないということなのか知りたい。

駒田委員 日本全国、地域の実態、地域に根差した教育というのは非常に大事だと思っている。子どもも減ってきて、そういった子育てを頑張ってる保護者も地域の方もおられる中で、

社会のいろんな情報とか変化によって、大人も自信がなくなってきた、子どもにどう関わればいいのか、親としてどう関わればいいのか、地域の一員としてどう関わればいいのかというところに少し不安が出てきている。

学校は学校、親は親、地域は地域それぞれのことをしっかりやりながら、一つのことに向かっていこうというのが本当の連携と思うが、それぞれに不安があって、その連携が、確固たるものになっていないというのは当たり前だと思う。

仁禮委員 子どもが小学校とかにいる間が、その地域や学校でいろんな活動があり、そこで、この人すごいリーダーシップあるとか、ちょっとこの人はみんなの前で言えないなとかいろんな人がいて、そういう中で形成されていくが、子どもが卒業してしまうと、親もそういう活動にかかわりがなくなって、そこで終わってしまう。

世代を飛び越えた生涯学習に取り組んだ方、そういう学校で活躍していた人、リーダーシップ持ってる人がそのままのつながりを持ったままで生涯学習に飛び込んでいって、いろんな人を巻き込んで、どんどん活性化していったほしいなと思った。

堀田生涯学習課長 そういう人が地域にいるのはわかっている。生涯学習でできるのは地域子ども教室、そこで水彩画とかを教える部分があるが、地域で頑張った方が活躍できる場というのはないと思ってる。

青少年健全育成協議会の役員を見ると、元PTA会長とか、役員をされた方の顔ぶれがあるので、組織的にはあるのかなと思うが、直接的に生涯学習でそういう方の活躍の場があるかといえば、ないなと思って聞いていた。

金澤市長 教育委員会に電話があると言われたが、それは小中学生の保護者なのか。

イメージとして教育委員会に電話してくるということは、ある程度切羽詰まった状況というものなのか、他に聞くとこがないから聞いてみようというものなのか、それは人によって様々かもしれないが、どういう感じなのか。

草野学校教育課長 小中学生の親からの相談は、部活動が多いという状況、低学年の子どもをお持ちのお母さんから、うちの子が、こうだけど、どうでしょうかという相談はある。それに対しては、就学指導というか、例えば、発達障害とかの子どもが多いので、就学に関して、まずはお話をしましょうということで、直接お会いして話を伺って、その対応の仕方が状況によって違うが、医療機関だったり、特別支援学校だったり、学校に直接行ってみて、一緒に対応を相談するとか、いろんな対応がある。

下田教育長 過去受けた中では、1番は子ども同士の友人関係で、それを学校の先生とかに話をしていただければ1番いいのだが、これはいじめじゃないのかと教育委員会に認定し

でもらって解決してほしいという相談は結構あった。

それと、不登校に関わる相談では、教育委員会にかけてこられるのは、学校の対応であるとか、周りの子どもの対応についての不平不満を言われる方もいらっしゃる。そこをどこかにその人が相談できるようなところがあればもう少しいいのかなと思う。

その人も目一杯でやっちゃっていると、母親自体も精神的に病んでいくというような例もあったと思うので、切羽詰まって言われる方もいるし、本当にささいなことを直接教育委員会が解決してほしいということで言ってこられるようなこともある。

駒田委員 当然子どもが存在するわけだから、2人以上になったらもめごとは必ず起きる。それこそ家庭と連携して取り組むことで、子どもたちの一つの経験として上につなげていくことができる。

1人で悩むのは苦しいと思う。だから、学校に相談をしてほしいと現職のときに言っていた。お母さん同士で相談ができる場合に、教育委員会でなくて学校に相談するという形で、学校とのつながりを深めていく。それがうまくいかなかったときに教育委員会に相談してみるという流れはあるかと思うのだが、いきなり教育委員会に言うようにアドバイスをすることがおられるかもしれない。

特に困るのが、一緒になって学校を批判するような形で物事を進めていかれること。

家庭と学校の問題行動が起きたときの連携というのは、それぞれの情報交換がうまくいっていないと解決は難しいが、まず家庭の中でその子のことについて相談をしたり、日頃から話し合いをしているとか、家庭もそういう機会が少ないのかなと思う。だから、当事者のお母さんが、お父さんから何とかしないとと言われて、悩んでいるという方が多いのかなと最近思う。

草野学校教育課長 いじめ不登校について、いじめの認知件数、令和元年度が小学校327と中学校25で、令和2年度も、ほぼ同数の状況になっている。

小学校の方が非常に多いのは、子どもが嫌だなと思ったことが事実であれば全て載っている。

平成28年度にいじめの捉え方の改定があり、そこから大きく増えてきている。

いじめを認知した以上は、それをきちっと解決をしないことには、苦しんでいるままには出来ないということで、達成目標を解消率100%に持っていくとして、学校と取り組んでいる。続いて不登校については、令和元年度で小学校が4人、中学校24人、計28人。令和2年度は、小学校8人、中学校26人、計34人という状況である。

不登校の予防の取り組みは主に学校が行い、教育委員会は、支援に力を入れるということで、不登校になった子どもには訪問指導員等の指導、児童生徒サポートセンターに子どもたちが来て学ぶという対応をとっている。

駒田委員 いじめのことでまた家庭教育に戻るのだが、例えば家庭訪問のときに保護者が、うちの子はいじめられているのでしょうかということをすごく心配されると思う。もう一つ心配してほしいのは、うちの子はよその子をいじめて困らせていないかという、こっちも心配してもらえたらいいなと思う。

下田教育長 いじめについて、見逃しをゼロにするのが学校の使命でもあるだろうし、学校だけではなく地域の力も借りていかないといけないと思っている。

いじめを解決するためのいろんな会議が学校でも催されているが、雲仙市では全て外部の人を会議に入れてもらうようお願いしており、交通指導員の方であるとか、日頃子ども会活動に携わっている方たちの目で見えて、情報提供していただくようにしている。

心配するのは、不登校になっていく子どもが、もしかしたらいじめが原因かと1回調べていったこともあるが、いじめが直接的な原因で不登校になるということではないようだ。

どうしても、本人の性格の問題もあるだろうし家庭の問題もあると思うし、いろんなところがあると思う。

草野学校教育課長 不登校の主な原因として、本市、県、全国の問題行動調査等がある。

本市の小学校で1番大きいのは親子の関わり方が、不登校の要因だろうと思われる。親離れ子離れがずっと続いてしまう。第2位が無気力不安、特に不安、大勢の中に入っていくことに不安を感じる子どもたちが出てきている。第3位が教職員との関係で、このようなものが上位ということである。

県全国は同様の傾向を示していて1位が無気力不安、全体の40%ぐらい、第2位が親子のかかわり方、第3位が雲仙市と違って、生活リズムの乱れが第3位となっている。

小学校の場合は不登校の数が、本市はそれほど多くないので、この傾向を見るには数としてはちょっと足りないと思う。

中学校は、ほぼ全国、県、本市が同様の傾向を示しており、1番多いのは無気力不安、本市で40%、県が37%、全国が42%で、ほぼ同じような傾向を示している。2番目に多いのが、いじめを除く友人関係で、いじめまではないけれども何となくあの人とうまくいかない、そういう悩みからのものが20%程度、これは本市、全国、県同様である。第3位が生活の乱れ、10%程度ということで、このような状況が主な要因である。

森下委員 夕方の時間の過ごし方で、部活をしている子は部活に行くけども、しない子は家でゲームで自由に過ごす。

部活も中学校の加入率が年々下がり、ほかのクラブチームに所属してるわけでもなく、自由に過ごしている児童生徒今からどんどん増えていくと思う。

中学校になるとスマホを与えられたりとかで、スマホを使う時間がなければ集中力は欠けて、時間も不規則になったり、眼精疲労であったり、いろんな症状が出やすい。

クラブ活動をしている子と全くしてない子では、体力の差が歴然と初めて感じた。体力の低下というのは、全体的にはすごく落ちてるんじゃないか。体力の低下が起きると集中力が落ちたりとか、いろんなことに対してのやる気が落ちたりとかにつながっていく。

学校の中でも、どうしても5教科以外の科目が多分少ないと思う。とにかく5教科を詰め込んで、子どもたちの中でも難しくはなってきたのかなと感じる。

その中で、やる気が出ないというのは、子どもたちも追い込まれてるところは当然あるし、先生方も余裕を持って相談を受けても、それにこたえることが出来ない状況にもあると思う。そういうところから、いじめであったりSNS同士のいじめであったりとか、やる気の問題というのは出てくるのかもしれない。

どうしても運動をやってないときというのは、やる気が出にくいような感じがする。今は、オリンピックがあつてるので、全体的に気持ち的には何か運動したいとか、応援をしているとやる気が出ているのではないかということが、何かに対して熱く応援ができたりとか、何かに集中することができれば、おのずといろんなことが改善できる部分のきっかけになるのかなと思う。

草野学校教育課長 この点については、5教科の授業、それから総合的な学習とか新たなものが入ってきてる関係上、音楽、美術、保健体育、技術家庭校については若干減ってる部分はあると思う。技術家庭については合わせて、週2時間から1時間、3年生については1時間で組まざるを得ないという状況と思う。

この教科の指導については、国の指導要領に基づくもの、あるいは法的に基づくものなので、この中でどう充実させるかというところで、学校は取り組んでいる。

部活動についても、生徒数の減が部活の減につながってるっていう部分は、確かにあるかなと思っている。部活数は、平成18年の部活数が85だったが、令和3年度で67に減っている。部員の数も平成18年度は1,554、本年度は881ということで約半分になっている。

前田教育長職務代理者 教育相談、不登校、いじめで、市内に勤めていた時に不登校が結構あって、原因も様々だったが家庭問題が多かったような気がする。1番記憶に残ってるのは、ご飯が食べられないという家庭があって、そういうことで不登校だったんだなとわかった。それから、先輩からいじめられるという話で、いろいろ調べたが、上級生がきついことを言ったことはあったんだけど、そこまでなのかなと思いながらも、教育委員会の指導のもと、私たち職員も謝りに行ったりしたが、なかなか許していただけなくて、警察にも行かれた。あるとき、転校しますと連絡を受け、何でかなと思ってたら、お父さんとお母さんが離婚され、結局家庭内のお父さんとお母さん子どもの対立があったみたいで、そこが原因だったのかと思うような例もあった。

もう1件は、携帯メールのいじめで、ふだんは仲よくしていて、一緒に登校するなどしてる

が、実は後でわかったことが、死ね、死ね、死ねと打っていた。警察が調べることになって、結果が出る直前に、自分が打ちましたという回答が出た。私たちも信じられない。いつも仲良く登校しているじゃないかという、一種のいじめがあったという例もあった。

金澤市長 長崎で子どもの権利オンブズネットというのかな、古豊さんという人が、本人も不登校の経験者で講演をしていて、非常に印象に残ったのが、以前は自分たちがNPO法人作って、不登校の子どもから報告を受けて、それを学校に伝えようと思っても、個人情報とかの壁でやりとりが出来なかった。今は自分が不登校の子どもから受ける情報を全部伝えるのだそうで。学校側に。そしたら、学校の先生も自分には見せない顔がこっちで見えて、いい方向につながったというふうな発言があって、大人もそうだが子どもも、こっちに向かった表情と、違う方向に向かった表情と、多分違うのだと思う。それを基盤として受け止めるようなことができれば今の状況よりも少し良い方に進む可能性があるかなと感じた。

下田教育長 子どもの2つの顔というか、こっちに見せる顔と、こっち見せる顔、それは当然あると思う。教育委員会でやってるのが、学校でも対応が難しくなってしまう子どもに、スクールソーシャルワーカーの力を借りたり、児童生徒サポートセンター事業での訪問指導員がアウトリーチ型で出かけていってということをやっている。

先日は、そこを立ち上げてからずっと来ていた女の子が3人、今高校3年生になってる子が突然遊びに来てくれて、今、こういう活動をしています、今、韓国語の1級検定に受かりましたとか言ってくれるので、あながちやっていたことは良かったんだろうなと思う。

二面性はあるので、そこにワンクッションというところの部分が、うちは1人、または2人で対応しているので、そこを膨らませていく必要があると思っている。

駒田委員 学校と地域の連携というので、素朴なことは声かけなのかなと思う。

不審者と思われるとかいろいろ話も聞きますが、やっぱり声かけが1番なのかなあと思う。挨拶とか。教育委員会の管理する施設があるので、そこに勤めるてる人は、意識的に子どもたちには声をかけてもらったらどうかなと思う。

挨拶だけでもいいし、そんなことを根気強くずっと積み重ねていくというのが、連携としてはそんなに強くなくてもいいのかなと思ったりした。

仁禮委員 地域や家庭の教育力の向上というのがかぎじゃないかなと思っている。

それには生涯学習ということが1番大きなテーマで、生涯学習も子どものときからそれに関わって、世代を超えた仲間づくり、人間形成、そして郷土愛を育む、そうするとその子たちがまたその社会の担い手として、ゆくゆくは次世代のリーダーとして、また次の若い世代につなげていくのではないかなと思う。

森下委員 気軽に声がかけやすいような地域になればと思う。うちはお店で、国道沿いなので、中学生が通るときには必ず朝、声かけをするようにしている。

そうすると子どもたちも、顔を覚えてくれて、家の前でなくても、気づいてくれたりとか、そういうことができている。

少しずつでも、積み重ねというのが最終的にはなるのかなと思う。地域の行事もどんどん衰退してきているので、小さなことを続けるしか、大きな解決というのは難しいと思うので、そういうことから始めることが1番大事なのかなと思った。

前田教育長職務代理者 ほぼ毎日中学生と話をしている、声をかけている。声かけは本当に大事だなと思う。先生たちにも声をかけろと言っている、顔を合わせるために。

あいさつ。おはようございます。と声かけてやると、必ず返事が返ってくるので、まだまだ雲仙市も大丈夫だろうと思う。これからも新しい策を練るために第2回の会議で、皆さんのアイデアをお聞きしたいと思う。

下田教育長 議題が抽象的で漠然と大きかったが、明るく子どもたちに接していく中で、地域を子どもたちが意識していけばいいのだろうと思っている。そうしたら、悪いこともしないでだろうし、そういう地域づくりを大人がやらないといけないだろうと思うので、学校教育だけではなくて、社会教育活動にもこれからは力を入れていかないといけないと思っている。

金澤市長 最近よく思うのが、今、正解がない。それで正解はこれといって、押しつけるとしんどい。しんどい人が出てくる。ものすごく複雑になってるし、絶えず変化するので行政で対応するというのは、本当に至難のわざだと思うが、無理にやってくしかないなので、できるだけ受け止めて、1人1人丁寧にやっていくことしかないのではないかなと思う。

子どもたちを見てて、複雑、1個の視点で、評価するというのが、出来ないと思う。そういう印象を持った。

富永教育次長 これで議事を終了する。

その他、委員から何かあるか。

以上をもって、令和3年度第1回雲仙市総合教育会議を閉会する。

【15：40 閉会】